福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

シナリオ　大志の果て　：　日下部太郎・グリフィス

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 坂手, 一成 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00029086

『大志の果て』・梗概

福井市立図書館の脇に立つ一つの記念碑。日下部太郎とW・E・グリフィスの胸像レリーフ「堕涙碑」である。

弘化二年（一八四五）六月六日、福井藩御先物頭、八木郡右衛門の長男として生まれた八十八は、実直で厳格な父と慈しみ深い母の元、快活で利発な、それに何よりも好学の少年に育っていった。

時恰も激動の幕末、安政の大獄で藩の青年武士達のよき先輩、よき師として敬愛されていた橋本左内もその犠牲となる。

「苦冤洗い難く、恨み禁じ難し…」父からその志の深さを諭された八十八は、いよいよ学問に励んでいく。

藩校「明道館」に学んで七年、二十歳になった八十八に、長崎「済美館」での英学修学の藩命が下る。

尊敬する矢島明道館幹事や三岡八郎（由利公正）に励まされ、志も新たに長崎に向かった八十八は、そこで、藩と所縁の深い熊本藩の横井小楠の甥、伊勢佐太郎（横井佐平太）、沼川三郎（横井太平）の兄弟に出会う。兄弟も留学中であったが、密航を企て渡米する。長崎留学は、八十八の向学心をいっそう奮い立たせる事になった。

両親にアメリカ留学の決意を打ち明けた八十八は、慶応三年（一八六七）二月、藩最初の海外留学生として勇躍長崎を船出して行く。八木八十八改め、日下部太郎二十三歳の旅立ちであった。

合衆国ニューブランズウィック市にある伝統校ラトガース大学付属グラマースクールに入学した太郎は、そこで奇遇にも、沼川三郎に再会する。ここでも勤勉ぶりを発揮した太郎は、わずか一年で大学二年編入を果たすのであった。そうした太郎の師として、また友として、常に暖かく接してくれた二歳年上の青年こそ、グリフィスその人であった。

大学で太郎は、理学を専攻、日夜を分かたぬ精進の日々は続いた。当時の合衆国は物価も高く、生活は苦渋を極めた。

本国で、年号が明治と改まったそんな折、太郎の元に父からの便りが届く。それは、藩籍奉還で職を失し、加えて次郎、三郎と相次いで息子を病いで失い、その母も病床と、すっかり気弱になった郡右衛門が、太郎の一日も早い帰国を促す便りであった。

しかし、卒業まで後一年、学問の実を上げて帰国する事こそが…と、心で詫びつつ、さらに己に鞭打つ太郎であった。

粗食に耐え、連日未明に及んだ勉学。無理が重なりとうとう吐血する。恐るべき結核であった。病魔と闘いながら尚も志を追い求める太郎であったが、卒業を三ヵ月にして、一八七〇年四月十三日、異国の地で不帰の人となってしまう。

大学は、太郎の真摯な人柄と直向きな努力を高く評価し、卒業を認定するとともに、最高の栄誉であるファイ・ベータ・カッパ賞の「金の鍵」を与えたのであった。

方、大学卒業後神学校に学び牧師として充実した日々を過ごしていたグリフィスは、ある日、恩師ライリー校長から日本で自然科学の知識や技術を教える事を勧められる。それは、奇しくも福井藩からの招聘であった。熟慮の後、これも牧師しての使命であると思い至ったグリフィスはこの招きに応じる。

明治四年（一八七一）三月四日、長旅の末福井に着いたグリフィスは、知藩事松平茂昭との接見を終えると、太郎の父を宿舎に迎えた。グリフィスは、太郎の彼の地での様子を真心込めて伝え、栄誉の「金の鍵」を郡右衛門の手にしっかりと握らせるのであった。

生命燃えつきるまでその志を希求し、空しくも異国に逝ったその人は、こうして故郷に戻ってきたのであった。

翌日からグリフィスの授業は開始された。熱心で工夫された授教、それにその誠実な人柄は、門弟や藩校関係者の信頼と敬愛を一身に集め、成果も目に見えて上がって行った。

しかし、わずか十ヵ月後、廃藩置県の政令公布により、福井での生活は叶わなくなる。

由利公正やフルベッキ（元済美館校長）の勧めで上京を決意したグリフィスは、明治五年一月十日最後の授業を終え、惜しまれつつ福井

を去って行く。
昭和元年（一九二六）十二月、日本政府の招きで勲三等旭日章の授与式に臨んだグリフィス夫妻は、翌年福井を訪れた。実に五十五年ぶりの春の事であった。そして、その日から五十幾年、更にあの昭和の時は流れ……
昭和五十七年五月二十七日、福井市とニューブランズウィック市は、日下部太郎とグリフィスの友情の絆を機縁に、姉妹都市盟約書を締結するところとなった。
それは、明治・大正・昭和と激動の一世紀を経てよみがえった心のかけ橋であった。